
あの年のクリスマス



ミモザの花

あの年のクリスマス

本当のサンタクロースにまだ会ったことのない人は
読んでだけではだめ。
とても怖いことが書いてあるからね。

くぬぎはる村

ローズバッド

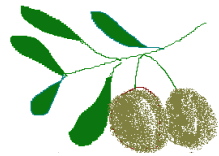
春から夏へ

恵比寿ビール

あの年のクリスマス

山猫軒

ミモザの春



私のお父さんとお母さんは、もうずいぶん前にくぬぎはる村に越してきました。もちろん私も一緒です。私はそのとき三歳になる少し前でしたから。だけど、くぬぎはる村では今でも私たちのことを、あの東京から来た人、と言います。

くぬぎはる村は、漢字で櫛原村と書きます。九州では、「原」はどんな場合でも「はる」と読みます。

お父さんは東京で会社に勤めていました。お母さんは毎日私たちにおいしいものを作ってくれていました。

ある日突然、お父さんが「さあ、あした、九州に引越すぞ」と言った、のではありません。お母さんがしみじみとした口調で、「九州に引越そうと思うのだけど、あなた方はどう思う？」と言った、のでもありません。もう私が生まれる前から、いつかくぬぎはる村に引っ越すことは決まっていて、農業を本当に始めることになったら、あれもしようこれもしよう、という家族のおしゃべりのなかで私は育ったのです。

でも、何も知らないでいて、「光ちゃん、引越しはあしたよ」と言われてびっくりしたかったな、と今ではときどき思います。

私は五人兄弟の末っ子です。真ん中の兄には、兄、姉、弟、妹が一人ずついます。さあ、私の兄弟の構成を当ててください。。。。

私の一番上の兄は『太陽』といます。姉の名は『月』です。その次の兄は『君』です。

なんていうのは、嘘です。でも、本当の名前もこんなです。

すぐ上の兄の名は『風』です。これは本当です。

そして、私の名は『光』です。「光かがやく」の光です。もしかしたら、「夕日」かもしれせん。

くぬぎはる村

九州に越してきたのは、あの年の12月のことです。とても寒かったあ。私たちのディーゼルカーが、杉林と、枯れ木と枯れ枝だらけに見える林の間をゆっくり登って行って、もういい加減退屈しきっていたみんなを励ますように、小学校6年の君さんは「なんだ坂こんな坂」と歌いました。

降りた駅は、これまで一度も修繕したことのないような木造だったことを覚えています。風が吹き抜けるので、お母さんの後ろにしがみついてしまいました。

そのあとすぐ、この駅舎もついに建て替えられました。歯医者さんみたいになってしまいました。

すぐにもみの木を買いに行きました。だってもうすぐクリスマスですから。私は小さかったから、もみの木は私の背丈よりもっとありました。それがすごく安いのです。（とお父さんは言っていました、これでは東京では枝しか買えない。。。）

大きなもみの木は、根っこが太い縄でぐるぐる巻きされていて、お父さんがそれを鎌で切って、冬に日陰を作らないような家の裏手の、お家のなかから飾りつけがよく見える場所に植えました。月桂樹も三本、近くに植えました。

「村役場が、引越しの記念に、とくれたんだよ」お父さんが月桂樹を植えながら言いました。

チューリップの球根もこんな季節になったのですごく安く、お母さんはきゃあっと喜んで、たくさん買いました。100個買っても、500円です。

春になって300のチューリップが咲く光景を思って、お母さんもお父さんも、私も幸福でした。しかし、ガーデンはもっと広がったのです。

ガーデンと言っても、そのときは畑でした。隣のおばあさんが大きな丸い大根を作っていて、たくさんくれました。ずっと後になって、今ではラベンダーやクリスマスローズ、バラやブ

ルーベリーのガーデンになっています。

このおばあさんのだった畑の一番見晴らしのよい所に、私たちの家がありました。畑の、玄関の近くにチューリップの球根を植えました。お母さんが「はいここよ」と言って私はその穴のなかに球根を置き、そうしてお母さんが次々と植え穴をスコップで掘っていくのです。

私は途中から風くんと遊んでしまい、私ではない誰か、が植え終わったチューリップガーデンを見ると、畑は杉の木の長い影のなかでした。根子岳の向こうに夕日が沈み、そこだけは広い畑のなかでガーデンしていました。

日暮れどきの寒さと言ったらありません。タオルを首に巻いたお父さんが、「あとは春になってからだよね」と言い、お母さんはいつものようにおいしいご飯を作るため、みんなで家のなかに戻りました。

ローズバッド

そうして、すぐにクリスマス・イヴです。だけど私は小さすぎて、そのときのことをよく覚えていないのです。

その年は太陽さんと月ちゃんがありました。翌年からはもういなくなりました。

お母さんがとっても大きなラザニアを作ってくれました。みんな大好きなのです。それから、果物がたくさん入った大きなクリスマスケーキ。八等分すると、七人家族だったから、あとの一個はいつもどこにいったのでしょうか。私ではありません。

クリスマスはいつも大ごちそうだったので、そのお料理がその年のことだったか、よく覚えていません。翌朝見つけたサンタさんのクリスマス・プレゼントは、本当にびっくりするほどのものでした。そのプレゼントがああの年のことであったのは、私たちはみんな知っています。だけど、それが何であったか、ここでは内緒。

ばあばが特別にサンタさんに頼んでくれたのです。ばあばというのは、お母さんのお母さんです。私はばあばが大好きでした。

それから、その年はホワイト・クリスマスではありませんでした。そのあと何回か、ホワイト・クリスマスなことがありました。九州であっても、ここは雪が降ります。お母さんはいつも花の種のカタログを見て、寒い地で育たないものばかりだ、と嘆いていました。

プラスチック製の赤いそりの名は「ローズバッド」号といいました。風くんと二人で乗っている写真が今でも手許にあります。大雪が降るのはいつも1月か2月なので、12月のことではありません。畑の端の土手から下の畑へ滑り降りるので、楽しかったあ。その土手はそれからあと、栗の木が植えられたり、雑草が生い茂ったり、牧草が生えたり。でもたいがい**ちがや**が生えたりで、荒れています。

風くんと雪のなかから家に帰って来ると、二人で足湯をしました。私は気をつけていないと、すぐにしもやけになるので

す。あっついお湯をお母さんが洗い桶に注ぎたし、二人とも足が真っ赤になります。

そんなこともあって、私は長靴を手に入れたのです。あるとき、お家のなかに入ると、私あての通販の荷物がありました。ギフト包装です。「お母さん！ 開けていい？」

出てきたのは長靴でした！

見かけはただの長靴です。それが、リボンをかけられてとても大仰にギフトギフトしているのです。私は、長靴はとても欲しかった、そのことに突然気づきました。しかし何だこの大仰な包装は。長靴をギフト包装している人はかかるそのとき、何を思ったでしょう。

そうであっても、その長靴はなかがぼわぼわしていて、雪のなかで何してもとても暖かだったのです。私は次に雪が降るまで、お家のなかで長靴をはいていました。

春から夏へ

そうして、待ちいに待った春。

最初にふきのとう。まだ寒い春の朝、畑をお母さんと歩くと、ふきのとうが見つかります。目が慣れると、ほかの緑とちょっと違う、薄い緑のふきのとうはそこらじゅうにあります。

初めてふきのとうの天ぷら、お味噌汁、ふきみそ、を食べたとき、何だこりゃ、と思いました。だけどそのときの私は、みんなが大好きなカレーよりも、ごはんと野菜がいっぱい入った味噌汁の食事の方が好きなほどだったのです。すぐにふきのとうもお気に入りのひとつになりました。春一番のふきのとうは私の毎年の楽しみです。

春はそれから、たらの芽、甘草、ごごみ、うど、と続いて、最後はたけのこ。

お母さんはいつも家にいました。畑の向こうの村道まで100メートルもあったので、めったにそこより先に行きませんでした。私と一緒に散歩に行くとき、たまに村道の方まで行くことがあって、畑の向こうの季節の変わりように驚いていました。私たちはよく家のまわりを散歩しました。

けどお母さんはたまに東京に用があって、お父さんが車であのJRの駅まで送って行くのです。そんなときお母さんは、カレーをどっさり作っておいてくれました。あとはごはんを炊くだけなので、それはお父さんでもできました。私たちはお母さんがいないとき、煮返し煮返し煮返したカレーばかり食べていました。

そんなとき私の気持ちはどこまでも落ち込んでいきます。私は、お母さんがいないのによくみんな平気ね、と思い、「カレーばかり食べていてよくみんな平気ね」と二人の兄に言いました。私はべそをかいていました。

「光ちゃんは何か別のものを食べる？」と君さんが訊いてくれました。そしてお父さんに、「このカレー、少し辛すぎるみたいだよ」

お父さんは翌朝のために煮干しを放り込んでおいた出汁で、お味噌汁を作ってくれました。じゃがいもとにんじんとたまねぎの、カレーの具そのままの味噌汁でした。

「私、本当はこういうのが好きなの」と私はべそをかきながら言いました。私はお母さんがいなくても我慢できるのです。

今では私も、カレーは大好きです。小麦粉を使わない、野菜がいっぱいの、お母さんが作るカレーを私も作ります。

春はみんなの誕生日が続きます。私の誕生日が春一番早くに来て、それからお父さん、君さん、お母さん。

私たちは一年かけて内緒のプレゼントをため込みます。早くあげたくてたまりません。一年我慢していると、大変な量になります。それをお母さんがきれいに包み直して、誕生日ごとにみんなのあいだを行き交います。

もうそのころにはいなくなってしまった、太陽さんと月ちゃんもみんな春が誕生日です。（風くんだけは、うっとおおしい梅雨どき、、、）

君さんがその年は、お母さんの誕生日に野草のリゾートを作る、と張り切っていました。「お母さんは何もなくてもいいからね」そう言って、私たちみんなで野草を摘みに出かけました。

風くんは遊んでばかりで、いつもは働き者の私も、そのときはあまり役に立たなかったかも、しれません。君さんはそういうとき、あまり腹を立てずに一人でできるだけのことをし、励ませばやってくれるのではないかと思ってみんなを激励し、さあみんな、あと少しだよ、と言い、次には独り言のように泣きごとを言い、最後には思いっきりへこんでしまいます。

夕方になって、つくし、よもぎ、わらび、、、あまりおいしそうでない草を君さんはそれなりにたくさん採りました。そして、腕まくりして水洗いしました。めがねがときどきずり落ちます。

「枯れていたり、硬そうなところは捨てなきゃだめよ」

まだ何を作ろうとしているのか知らないお母さん。

「チキンコンソメをください」と君さん。「それから、玄米を三合」

「玄米？ 白米ではなくて？」

「本にそう書いてあるもの」

もう夕飯どきなのに、これから玄米を調理して間に合うのかしら。

そして、野草はぐちゃぐちゃに煮え、玄米が生煮えの、本に書かれていたのとは大違いの料理ができました。憮然とする君さん。

お父さんは少しは君さんのフォローをしてあげればいいのに。見ると、お父さんはおなかをすかして涙を流しているのです。窓の外、遠くを見ていて、それはまるで、遠く未来を見ているようでした。そうではなくて、未来から遠い今を見て、涙を流しているのです。

よく覚えていませんが、リゾートはきっと洋風おじやになっただろうと思います。風くんと私はそのとき摘んだ野の花をお母さんに贈りました。お父さんは自分の読みたかった本をお母さんにプレゼントしていました。

夏、お父さんがガーデンの一角に小山を作って、その全部にお母さんがペニーロイヤルを植えました。私たちは小山を覆ったペニーロイヤルにもたれてお弁当を食べました。何が面白いのか、毎日休まず、君さんは中学校、風くんは小学校です。だから、私たちは三人だけです。

お母さんは天然酵母の全粒粉のパンを一度にどっさり焼きます。

「光ちゃん、サラダ野菜を採ってきて」と言うので、私は朝露に濡れたサラダ野菜をボールいっぱい採ってきます。お母さんはオリーブオイルのマヨネーズをたっぷり使って、ベーコンと卵のサンドイッチを作ります。

赤か白のワイン、それから私は梅ジュース。籐のお弁当箱にその朝作ったサンドイッチが入っていて、私たちはペニーロイヤルやタイムが香る、眩しい日差しのガーデンでお弁当を食べ

ました。

だけど本当は、農業はとても忙しく、お父さんとお母さんは夏のあいだ田んぼの草取りばかりしていました。私が保育所に通ったのは小学校へ行く前の一年間だけでしたから、その前の二年間はいつもお母さんとお父さんと一緒でした。私はその二年間に戻りたい。だけど、田んぼの草取りのとき、私は一人で何をしていればよいのでしょうか。

お父さんとお母さんは背中を蛇に刺され、泥だらけの手でままならず、やぎのようにからだを震わせます。私の家にはやぎもいたのです。

やぎは、やぎさんと呼ばれただけで、ついに名前がありませんでした。私は、あのとき私といたやぎさんのことをもっと詳しく書いてみたい。本当のことを言うと、私にはあのやぎは永遠のテーマなのです。いつか、どこか、別のところで、きっと、書くぞお。

お父さんとお母さんが田の草取りをしているとき、私は田の畦で歌を歌いました。歌いきってしまうと畦を端まで歩いて、俯いて反対の端までまた戻ります。そして、もう新しい歌が思いつかなくて、始めから歌い始めるとそれがだんだん鼻歌になり、「私、我慢しているんだけど、本当は泣きたいんだからね」と言いました。私は泥だらけでもいいから、ペニーロイヤルのところに戻ってお弁当を食べたくてたまりませんでした。

お父さんは一枚の田んぼの隅をならして、苗で文字を植えました。5月に田植えをし、6月にはよその田んぼは青々としているのに、私のところは薄緑でひよろひよろしていました。その文字も何て書いてあるのかわからないほどです。

それは、「RAY」と書いてありました。夕日ではない、薫風に光り輝く「RAY」です。夏になって穂が出るころ、緑の美しい田になり、風が田んぼの上を吹き抜けていきました。

秋になってお父さんは「RAY」だけを手で刈り、藁でひと握りを縛って、私の部屋の窓に飾ってくれました。そのときは黄



金色であった稲穂も、いつしか杉の木の壁の色にとけ込んで誰も気づかなくなり、今でもそのまま私のだった部屋にあります。



恵比寿ビール

この家で何回目かのクリスマスがまたやってきました。もみの木があれからずいぶん大きくなり、その枝をひとつ折って、それと山から採ってきたあけびのつるとで、大きなリースを作りました。

クローバーの花輪（春）も、ラベンダースティック（夏）も、みんなお母さんが作り方を教えてくれました。

緑のリースを玄関の扉に吊るし、南天の赤い実をつけると、心はいっぺんにクリスマスです。ひいらぎの刺だらけの葉っぱ、赤いばらの実、乾燥したハーブ。ガーデンにあるものでリースをたくさん飾りつけました。大きなニンニクまでぶらさがっています。まるでドラキュラ除けです。

イヴの夜は、お父さんがとっておきのワインを開けます。

その前からお父さんは台所でうろうろしています。お母さんを手伝うふりをしながら、料理用のワインをちびちびやっているのです。突然みんなに背を向けて、鶏が水を飲むときのような恰好をするので、それとわかります。ワインは少ししか料理に使わないのに、料理が終わるころにはもうほとんど無くなっています。

とっておきのワインの栓はぼんと開いて、勢いよく跳んでいきます。私たちは梅ジュースです。梅の季節、蜂蜜に梅を漬けておいて、それを水で割って、氷を浮かべて飲むのです。

トマトソースの Pasta。トマトは夏に食べきれないほど採れるので、皮ごとフード・プロセッサーでがりがりし、一年分を冷凍で保存してありました。鶏もも肉のキウィフルーツ・ソース。付け合わせの温野菜は、最後の段階でもも肉とともにあまり調子のよくないオーブンで焼いたので、ところどころ黒く焦がっています。

鶏は卵をよく生みましたが、もも肉はうちではありません。やがて鶏はいなくなり、代わりに合鴨がやって来ました。

「合鴨は水鳥だからとても羽はむしれないよね」とお父さんは

言っていました。だからと言って、鶏にだってお父さんは何もしなかったのです。

合鴨は、夏のあいだ田んぼをせっせと泳ぎまわり、お父さんとお母さんの田んぼのつらい草取りは解放され、翌年の春にはたくさんの卵を生みました。

私たちはそのころ、自給自足を目指している一家、と見られていたようです。「肉や牛乳はどうするえ」とよく訊かれました。近くに山の幸、野の幸を熱心に採取する一家が本当にいました。

私が生まれる前、太陽さんと月ちゃんが子供で、君さんが赤ちゃんだったころ、かなり本物のマクロビオティック一家だったそうです。「原材料大豆・小麦」を、お母さんが魔法のように肉に作り替え、三人の子たちはあるがまま食べます。あるときよその家で君さんが、君さんにとってきっと初めてのカツ丼を食べ、そのときもらったことばを、お母さんはいつまでも忘れません。君さんがそうしたように目を大きく見開いて、何度も何度も大笑いして話します。

でもお父さんだけは違います。私たちが霞で生きていくとき、きっとお父さんはお酒だけあればオッケーなのです。

イヴの夜はみんな早く寝かされます。私はお母さんと寝るのが大好きなのです。ところが、この家を建てたときに何を思ったかお父さんが、余った材木で私のためにベッドを作ってくれて、早くから私はそのベッドで一人で寝るようになっていました。

「そうだ光ちゃん」とパジャマ姿の風くんが私のところへ来て言いました。「サンタさんにお礼をしよう」

私は大事にしまってあった緑と赤のカードを見つけてきました。

そのあと私たちは、お母さんとお父さんが何やらごそごそやっている暖かい居間へ降りていきました。

「お父さん、ビールある？」と風くんが言いました。

「何ほでもあるから何ほでも飲んで」と酔ってご機嫌なお父さん。

「サンタさんにあげようと思って」

風くんはストックルームから缶ビールを一本持ってきました。この季節になると、冷蔵庫に入れなくても凍るくらい十分冷えているのです。それを横目で見ていたお父さんが、「サンタさんは発泡酒より恵比須ビールの方が好きだと思うよ」と的確なアドバイスをしました。

「光ちゃん、行こうぜ」

サンタさんとぼったり鉢合わせしたって、私はへっちゃらです。できることなら風くんがお相手してほしいので、風くんのあとにぴったりついて、私たちはいつもサンタさんがプレゼントを置いて行ってくれる暗い西の部屋に行きました。そして、大きな布の袋をたたんで、その上に缶ビールを置きました。その袋のなかに、去年いっぱいプレゼントが入っていたのです。

暗い部屋にサンタさんはまだ来ていなくて、冷えきった量のおいだけでした。

風くんと私はさっきのカードも置きました。

『サンタさんいつもありがとう。ビールを飲んで行ってください』

風くんはそう書いていました。私は酔っぱらって赤い顔をしたサンタさんと、トナカイの扮装をしたやぎの絵を描いていました。

「そうだ、光ちゃん！ 窓も開けておかなければね！」

そして窓を開けました。凍えるような風が吹き込んできたので、ほんの少しだけにしました。

お父さんとお母さんは暖かくて眩しい光の部屋で、同じビールを飲んでいました。お母さんも恵比寿ビールが大好きなのです。

「それでは今度は煙突も作らねばね」と少々酔っぱらい気味のお父さんが夢見るように言いました。

翌朝、私はうれしそうな風くんの大きな声で起こされました。

「光ちゃん、ビールが無くなっているよ!!!」

そしてもちろん、これまでそうであったように、たくさんのプレゼントが袋いっぱい詰まっていた。

サンタさんが残していったメモ。
『ビールをありがとう。また来年も頼むね』

あの年のクリスマス

あの年、私は散々でした。

私は学校のプールが大嫌いです。あの青い水が怖いし、その水は変な臭いがするし、水のなかで息をうまく吐けないし、息継ぎのときまるで溺れているみたいにあっぷあっぷしてしまいます。何年かあとになって25mを泳ぎきりました。そのとき私は一度も息継ぎをしませんでした。

そして私は、しもやけになりやすいのと同じように、水に浸かっているとすぐに唇が真っ青になってしまうのです。あの悪がきども。みんな私を好きなくせに、今度私の蒼い唇を囓したてたら、どうしてくれよう。

そんな年の夏。

九州はよく夏に台風が来ます。あの台風も前から来るのがわかっていただけだから、さっさと休校にすればよいのに。私は悪がきどもをそう思うように、学校へも不平不満でいっぱいです。

お父さんが3Kmぐらい先の、スクールバス停まで車で送ってくれました。小学校はそこから4Kmぐらい先にあります。スクールバスだって私の家まで迎えに来ればよいのに。

台風は、台風の予定通りくぬぎはる村を直撃することになり、私たちが学校に着いてすぐ学校の休校が決まり、帰りのスクールバスが出ることになりました。いつものワンパターンの、退屈な授業と、まあ少しはましな給食と、退屈な午後の授業と、帰りのスクールバスが出るまでの退屈な時間、の退屈な一日。これらのパターンが突然くずれて、降りたばかりのバスにまた乗り込むとき、私は早くお家に帰れるのが嬉しかったあ。そしてスクールバスは大風にハンドルをとられながら色々なバス停を巡り、私のバス停に到着しました。

そのとき私は突然気づいたのです。**お父さんが来ていない。**

私が3Kmの道を歩いてお家に着いたとき、お母さんもお父さんもびっくりしました。傘はばらばらで、私はびっしょり。

あの日の私の行動パターンは何が悪かったのでしょうか。私は職員室へ行って、学校がお休みになって早く帰ることを電話しておかねばならなかったのです。

そして、あの日。

私がお家に帰ると、お父さんもお母さんも誰もいませんでした。きっと田んぼに行っていたのです。もう秋で、夕日が家のなかに長くさし込んでいて、私は誰もいない部屋に一人で帰って来るのが大嫌いでした。今でも一人だけだと、ため息が出ます。

おやつが置いてあると、少しは気が紛れます。その日は、大きな宅急便の荷物がありました。しかも、私あてだったので。私は通販業者からの荷物を、迷うことなく開けました。

お母さんのばらの花のためのスプレー、その他。
お父さんのワインのためのソムリエナイフ、その他。
君さんの鉱石堀りのための銀のハンマー、その他。
風くんのためには数学、その他。

そして私のためには、

水泳のときのための鼻の栓
大雨のときのための携帯用のレインコート
ばあばとの写真を飾るための写真たて

きれいな写真たて。

そういうものばかりではなかったかもしれないけど、これまでの年がそうであったような、いつものクリスマス・プレゼントでした。

まだ秋なのに。

お父さんとお母さんは田んぼに行っていたのではありませんでした。家の隣に工房を建てていて、大工さんを手伝っていました。私が帰って来たのに気づいたお母さんがやって来たとき、通販の雑貨の荷物がほどかれたままで、私はもうそこにはいませんでした。

「光ちゃん、ほんとはね」とお母さんが言いました。

「嘘でもいいの」と私はベッドの向こうの木の壁に向かって言いました。

「嘘でもいいから、あれはサンタさんからのプレゼントだったと言って欲しかったのに。」

「サンタさんが先に送ってくれたのーそう言ってくれれば私は信じたのに。」

「だって、ピアノはサンタさんが持ってきたのでなく、トラックで来たじゃない。」

「ばあばがサンタさんに頼んでそうしてもらった、と言われて、あのとき私は信じたのに」

「そうだ、ばあばは光ちゃんのことを大好きだったね」とお母さんが言いました。

私はばあばのことを思い出し、ガーデンのブランコに二人で乗っていたことを思い出しました。私はばあばのこともいつか書いてみたい。

大工さんが工房に色々な道具を備えつけました。食べきれないほどたくさん採れるトマト、ブルーベリー、ハーブ、を加工して、ソース、ジャム、お茶や調味料を作るのです。それから、私たちの大好きなパスタがいつでも食べられるよう、木のいすとテーブルがありました。レストランみたいです。

工房はその年の、クリスマスの少し前に完成しました。ああ、そこにはサンタさんが通り抜けられそうな、太くて大きな煙突もありました。

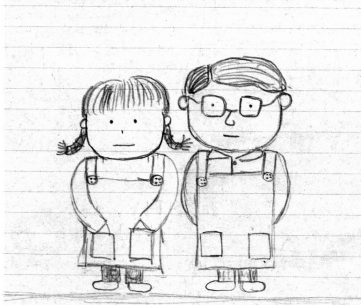


工房の名前は『山猫軒』といたしました。

お母さんはよく本を読んでくれました。お母さんはとても読むのがじょうずなのです。お父さんさえ眠らせてしまいます。

「猫の事務所」、「なめとこ山の熊」、イーハトーブ、ポラーノの広場、種山ヶ原。。。それから、「よだかの星」を読んでいるお母さんは泣いていました。

お父さんとお母さんは『山猫軒』のことを「注文の少ない料理店」と呼んでいました。私も、（きれいな）**空気**と（おいしい）**水**だけしかないこんなところにお客さんが来て、パスタを注文してくれるとはとても思えません。



私たちの山猫軒では、冬のあいだストーブがいつも燃えています。

「くぬぎの薪のほうが上等なんだけどね」お父さんが言いました。「杉はよく燃えるから、杉だっていいよね」

私は赤い炎と、太くて大きい煙突を見上げて、ため息をつきました。

その年のクリスマス・イヴには大勢の人たちで賑わいました。レストランのお客さんではありません。こんなところまで来てくれるお客さんは、やっぱりまれでしたから。お客さんは、この工房を造ってくれた人と、それからこの工房に関心を持ってきている人たちでした。太陽さんと月ちゃんも、私の小学校の友だちもいました。

みんなおいしいお料理を持って来ていて、大きなお皿からそれを取り分けて、どれもおいしくて、私はお腹いっぱいです。豆腐や卵のお料理、冬のおいしい野菜のお料理。自分とこで燻製にした鶏がまるごとごろん。つけあわせが大根や白菜の漬け物なのがおかしいです。お母さんが用意したのは、大きなピザ

と、大きな野菜がそのまま入っているポトフです。

早くから来て遅くまでいる人と、遅くに来て、さっさと帰る人がいました。お父さんは大勢の人がいる時間を見はからって、椅子から立ち上がりました。

「みなさん」とお父さんは言いました。

「私たち家族は人見知りで出無精です。あたかも自給自足するように、閉じこもりしてしまいます。」みんなぶ、ぶーと言いました。

「この工房を始めたことで、大勢の人と知り合うことができました。皆さんが今日ここに来てくれたことを感謝しています」

そしてお父さんは自分たちの農業を語ったようです。

見てくれは悪くても、自分で作ったものは何でもおいしいこと。農業も化学肥料も使わなくてもたくさん収穫できたこと。食べきれないから加工をし、さらにレストランも始めたこと。。。

私のまわりの大人たちは、話を聞かずにおしゃべりばかりしています。私は人指し指を口に当てて、しーと言いました。

お客さんは農家ばかりではなく、「なば」農家もいたみたいです。くぬぎが何かの木を植える話ばかりしていました。せめてピアニストがいてくれれば、私と話があうのに。

「なば」とはしいたけのことです。なばをくぬぎで育てるので、くぬぎは「なば木」です。くぬぎは落葉しないで、春の新芽が出るまで、枯れ葉をいつまでも冬の枝につけています。

私が初めてこの村にやって来たとき、ディーゼルカーの車窓から見た、あの枯れ枝だらけの枯れ木のような林は、くぬぎ林だったことを今では知っています。あれはいったいいつのことだったでしょう。

「新しい人と知り合えることは、とてつもなく世界が広がります。私は学ぶことばかりです」お父さんは向こうの方で話しています。

「『農』は素晴らしい。『農』に携わることは、この上ない喜

びです。藁を山積みして、トラクターで牽引して田んぼから帰ります。すると、『農』をしているんだ、という喜びでいっぱいです」

私も藁いっぱいのトレーラーに乗って、途中藁が落ちないように、ずうっと藁を押さえていたことがありました。藁藁藁。「子供たちが喜んでくれる、そう信じられることをいつのまにか選択してきたようです。時として子供たちに押しつけてあっても、です」

君さんは、あの道は怖いんだよう、と言ってました。杉の木が道の両側にそそり立って昼なお暗く、中学校からの帰りの自転車の、そのうしろから、どこからともなく何かの音がするのです。私もあとになって、嫌というほど思い知らされました。もう少しお家が学校から近ければいいのに。



まっすぐ行っ
てはいけな
い、そこを
曲がるのだ。
道に迷うぞ。
道を尋ねる
とき、自分
のことはか
りでなく、
人の話もよ
く聞くのだ。

次に曲がる
までの、底
知れぬ不安
の一本道。
杉林しかな
い。右かそ
れとも左か。
山猫軒に辿
り着くこと
が
まるで人生
であるなら、

山猫軒への道案内はまるで
詩のようだね。

反歌

猪もあなたも時雨れて道に迷い
灯ともる山猫軒でちよといっぱい

突然こちらの、騒がしい席の一番端にいた詩人が立ち上がりました。

「ちよいとそこのお客さん」

お客さんはみんなふりかえりました。

「という題の新作のソネットです」

詩人が自作の詩を朗読するというので、気をつかってまばらな拍手。向こうの方でそれに気づかないお父さんは、自分の話に夢中です。

ちよいとそこのお客さん

山猫軒に辿り着けないからといって、どうか
嘆げかないでおくれ。
山猫軒は永遠の希望でも、深い絶望でもない。
確かにここにあるのだから。

詩人は読み終えて、大勢の拍手に照れていました。

驚いたことに、遠くの席でお父さんは、腕をふりまわしてまだスピーチしています。

「遠くから道に迷いながら、やっとの思いで辿り着いたお客さ

まが、おいしいと喜んでくれます。するとついついサービスしてしまうのです。喜んでくれる子供たちにそうしてきたように、です」

「このワイン、おいしいでえす」とこちらの方の席から女の人が、いつ終わるとも知れないお父さんのために、まぜっかえしました。

「『あれかこれか』で迷ったとき、『あれ』ではなく、子供たちが喜んでくれるかもしれない方、『これ』を選択してきました」それから、その女の人に言いました。「それでは、そのワインで乾杯しましょう」

みんな、何度目かの乾杯をしました。

みんな立ち上がっていました。それは乾杯のためであったのか、やれやれと思ってであったのか。。。感動のあまり、とお父さんは信じています。もう誰にもわかりません。

お客さん持参のお料理のほかに、持参のお酒もたくさんありました。目隠しして、銘柄当てなんかをしていました。赤ワインはどっちだ、白ワインはどっちだ。芋焼酎はどっちだ、米焼酎はどっちだ。そんなの、私にだってわかります。たぶん。

外では、なば農家と詩人の一団が大きな木をかかえ、シャベルを振って走りまわっていました。青白い月明かりのなか。まるで狸か兎のよう。私は空想がふくらんで、頭がくらくらします。

あれだけ酔っぱらって、いったいどうやってみんなお家まで帰れたのでしょうか。夜が更けて、とうとうほかのみんなも、凍えるように冷たい夜のガーデンに繰り出しました。花火に火をつけ、カメラのストロボのように花火が燃え上がり、みんなで記念撮影をしました。

こんなに大勢の人が家に来て、こんなに大騒ぎしたことはありません。私はこの年のクリスマスのことを決して忘れません。

ミモザの春

「あら、こんな所に木が植えられている」と翌朝お母さんが言いました。

あたり一面霜がおりて真っ白でした。ストーブの煙突は高くにあるのに、紫色の煙は低く立ちこめていて、懐かしい匂いがしました。お母さんは毛糸の帽子とマフラーと手袋をしていました。私はそのインカの文様のような手編みの原色を今でもよく覚えています。この年のクリスマスのことだったら、私は何でも覚えています。

「きのう、誰かが植えていったのかしら」と言いながらお母さんが見上げるほどの、大きな木が植えられていました。お父さんはお家のなかでダウンしています。

それはミモザでした。豆科アカシア属ミモザ。

ミモザは冬のあいだも休まず成長して、春になって黄色い小さな花を木いっぱいにつけました。その前の年に大学へ進学した君さんが春休みに帰省して、お父さんお母さん風くんと私と、五人でミモザの花の前で記念の写真を撮りました。。。

その後何年かして、風くんが大学に合格して旅立つときも、すっかり大きくなったミモザの木の、満開の花の前で四人で写真を撮りました。その朝は霧が深く、とてもきれいな写真になりました。

だから私も、本当はいつまでもこの家とお母さんのガーデンにいたいんだけど、旅立つ日にはきっとそうするだろうなあ、とそのときぼんやり思ったのです。満開のミモザ。根元にはお母さんがこぼれ種で育てたクリスマスローズの花。春の気配とめじろのさえずり。三人だけの記念写真。



私はもうすでに、これまで私がもらったクリスマスプレゼントの本当のことを知ってしまいました。だけどだけど。。。あのミモザの木は本当にサンタさんが植えたんだということも、知っています。

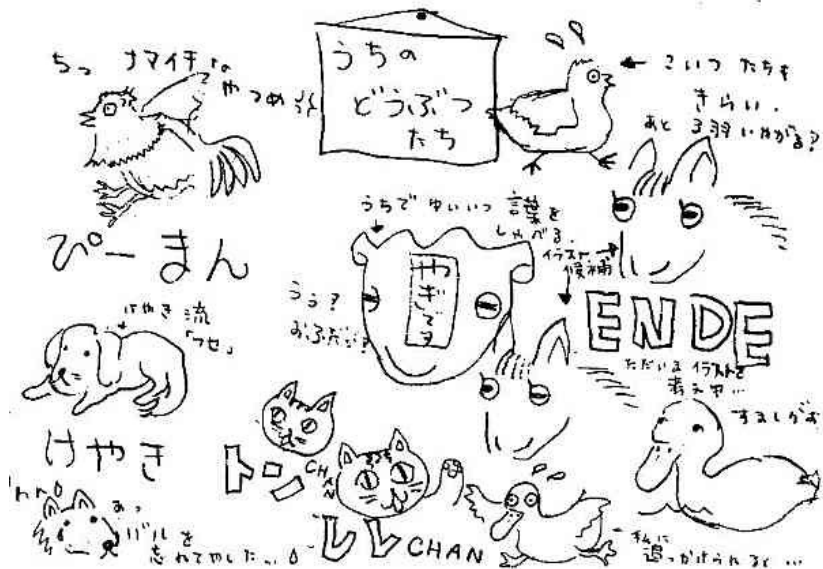
そうしてお父さんとお母さんは、私たちがみんないなくなって、二人だけになって、その後どうしてるかという。。。。



20年後。。。。

実はまだ山猫軒をやっているのです。





あの年のクリスマス

2008年2月24日印刷

ニンナ♡ナンナ

大分県竹田市荻町太平

0974-68-2778

<http://www.ninna.jp>

2月24日は光の誕生日でした。
風と光は本名だったかもしれません。



やまとコスモス